

スカンジナビア派遣団に参加して

佐藤 真治

今回世界青少年交流協会2000年スカンジナビア青少年派遣団の一員として、素晴らしい体験をさせて頂いたことを心より感謝御礼申し上げます。こうして、1ヶ月以上も経つと日々の忙しさの中で、あの2週間は、遙か昔の遠い夢のようにも思えてくるのですが、じっくり思い出すとなんとか切なくなるから不思議です。それが、嫌で毎日思い出さないようにしているぐらい、あの2週間は夢の日々でした。

私の目の前の現実、ろくなものではありません。フィヨルドやストックホルムほど、美しいものは何一つありませんし、ジャパナイトで、小林さんのちょんまげをとったほど、おかしいことはないし、出張で泊まったホテルには、そこまでお楽しみはないし、あんなに、トナカイの皮を欲しがったり、セーターを買い込んだり、何かといえばマグカップを買い、絵葉書を出したり（そりゃ、私だ！）、あんなにレストランの店員に失礼をしたり、なにごとにも寛容な人は、そうそういないのです。

写真撮影に値するほどの、あんなにでかいサーモンも、毎度のニシンも、チーズの山ももう食べられません。ただ、最近ゆで卵をスプーンで、ほじって食べるようになりました。

残念といえば、参加者の御身内の御不幸があり、1人緊急帰国になったことですが、私としては、人生で、3指に入る能天気さでした。

私は、県議会議員という仕事柄、なんとかあの体験を9月の本会議の質問に持っていけないかと思いました。チボリ公園（倉敷市にもあるのです）は、諸般の事情で無理でしたが、ホームステイ先の奥さんと自転車をこいでソーホエの町をまわったことは、吉備路自転車道の質問になりましたし、ジョンのバスに落書きされたのは、落書き防止キャンペーンをしよう！！なんて、形でつながりました。そして、今後の政治活動をしていく中で何か根本的なものを学んだ気もするのです。

以下は、私が、毎日様々な人に送っている県政報告の一文です。

今回のデンマークのソーホエでのホームステイや、北欧を巡りつつ気づいたのは、彼ら北欧人（欧米人一般か）が、「家族」を単位に動いていることです。そして、自由にも分が、あるということです。（略）週の労働時間は、37時間と法定され、地方では、繁華街でも平日は午後7時、土日は基本的に休み、（略）4週間の夏休み。その労働時間以外を彼らは、「家族」と過ごすのです。なぜなら、一番「家族」が、大切だからです。（略）彼らは、「家族」という単位で楽しむのです。逆に、「家族」には、役割があります。「家族」という共同体が、円満であるために、それぞれの立場に責任があります。つまり、分もあります。子どもは、子ども。犬は犬です。夫の家事参加であれ、子どもの自立であれ、「家族」という規制の中で行われます。

そして、そこには暗黙の倫理・道徳があります。あからさまな性の形をありのままに表

現しても、堪えうる社会規範があります。そして、それは、障害を持つことや老いるといった、人間として、人間なら、普通にあることを決してタブー視しない、真正面から論じる、強さや優しさと背中合わせなのです。

そういった、倫理・道徳・社会規範が、厳然とあつての「家族」であり、「個」なのです。あるいは、「家族」こそ、倫理・道徳・規範の場なのです。社会も、学校も、職場も、「家族」の延長線上や、「家族」にリンクして初めて存在するものです。多分、これらは宗教的な背景もあると思います。また、その限界になる規範を理解しないものに、自由はありません。したがって、子どもに自由はありません。(女子高生が援助交際してはいけない理由は、これで説明できます。)大人になるというのは、社会規範を認識することです。逆に、子どもを叱るだけの、無軌道な自由を制限するだけの倫理・道徳・社会規範の実践が大人には必要です。

そして、21世紀日本人が名実ともに復興するためのキーワードは、「家族」だと思います。例えば、このことは、若者に迎合することが文化であったり、街の活性化のためには、若者が来なくてはいけないと思ひ込むといった一時のブームに媚びへつらうような戦略の変更を促すと思います。(以下略)

突き詰めれば、今回の派遣で、私は、「家族」の重要性を学んだわけですが、昨今の17歳の問題など、解決の糸口になればと思います。

来年以降もこの派遣を通じて様々な形で、多くの方に還元ができるよう、WYVEAの益々の発展を心よりお祈り申し上げます。本当に、ありがとうございました。

(で、倉敷チボリ公園で、いつ遊ぶのよ。)